

蘇軾詩注解（二十七）

山本和義
蔡毅
中裕史
中純子
原直枝
西岡淳

（南山読蘇会）

中国宋代の詩人蘇軾の以下の作品について注解を施す。括弧内の数字は東北大学中国文学研究室作成『蘇東坡詩作品表』による通し番号。

秦少游・王仲至が「元日立春」に次韻す 三首（一九三八・一九三九・一九四〇）

上元に楼上に侍飲す 三首。同列に呈す（一九四一・一九四二・一九四三）

蔣穎叔が熙河に帥たるを送る 並びに引（一九四五）

再び送る 二首（一九四六・一九四七）

穎叔が燈を觀るに次韻す（一九四八）

王晉卿が詔を奉じて高麗の宴射を押るに次韻す（一九四九）

錢穆父・王仲至が共に田曹の梅花を賞づるに次韻す（一九五〇）

襄陽の従事李友諒が錢塘に帰るを送る（一九五一）

吳伝正が「枯木の歌」に次韻す（一九五二）

一九三八・一九三九・一九四〇（施三三・三三・三四・三五）

次韻秦少游王仲至元日立春三首

秦少游・王仲至が「元日立春」に次韻す 三首

一九三八（施三三・三三）

その一

- 1 省事天公厭兩回
事を省く天公 兩回を厭い
- 2 新年春日併相催
新年 春日 併せて相催す
- 3 殷勤更下山陰雪
殷勤に更に山陰の雪を下して
- 4 要與梅花作伴來
梅花の与に伴を作して來たるを要す

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○秦少游 秦觀（一〇四九―一一〇〇）。少游はその字。蘇軾「秦觀秀才が贈らるるに次韻す。秦は孫莘老・李公拱と甚だ熟す、將に京に入って筆に応ぜんとす」詩の詩題の注『蘇東坡詩集』第四冊五九二頁）を参照。○王仲至

王欽臣のこと。仲至はその字。「葉公秉・王仲至和せらる、次韻して之に答う」詩（『蘇軾詩注解（二）』）の注を参照。秦觀の元の詩（元日立春 三絶）は、『淮海集』巻一〇に収める。王欽臣の元の詩は伝わらない。

1〇省事 『晉書』荀勗伝に、「吏を省くは官を省くに如かず、官を省くは事を省くに如かず、事を省くは心を清むるに如かず」とある。2〇新年春日 元祐八年の元日が立春と重なったことをいう。3〇殷勤 ねんごろに。〇山陰雪 山陰は県名で、今の紹興市（浙江省）にあった。『世説新語』任誕篇に、「王子猷 山陰に居りしとき、夜大いに雪ふる……」という、王徽之が雪の夜に戴逵を訪ねたが、途中で興が尽きて引き返した故事が知られる。

天帝は手間を省くため二回に分かつことを嫌い、新年と立春とを合わせて同じ日にした。その上懇ろに山の陰に雪を降らせて、梅の花と連れ合いになるようにさせた。

一九三九（施三三二四）

その二

- 1 己卯嘉辰壽阿同* 己卯きぼうの嘉辰かしん 阿同あどうを寿ことほぐ
 - 2 願渠無過亦無功 願ねがわくは 渠かれ過あやまち無なく亦また功こうも無なからんことを
 - 3 明年春日江湖上 明年めいねん 春日しゆんじつ 江湖こうこの上ほじり
 - 4 回首觚稜一夢中 首こうべを回めぐらさば 觚稜こりよう 一夢いちむの中うち
- 〔原注〕子由一字同叔元日己卯渠本命也（子由 一いつに同叔どうしゆくと字あざなす。元日がんじつ己卯きぼうは、渠かれの本命ほんめいなり）

1〇己卯一句 阿同は、蘇轍のこと。彼の字は子由だが、別に同叔の字もあった。3〇江湖上 この頃、蘇軾が越州を乞うて許されなかったことと関わりがある。『蘇軾年譜』下冊一〇九四頁、元祐八年六月甲寅（初八日）の条を

参照。4〇舳舻 建物の屋根の高く尖り出たかど。立派な宮殿などをさすことが多い。班固「西都の賦」(『文選』巻一)に、「壁門の鳳闕を設け、上は舳舻して金爵を棲ましむ」とある。また、杜牧「杜秋娘詩」(『樊川文集』巻一)に、「舳舻 斗極を払い、首を廻らして尚お遅遅たり」とある。「原注」 1句の注を参照。本命は、生まれた年の干支。「三国志」魏書・管輅伝に、「又た吾が本命は寅に在り、加えて月食の夜に生まる」とある。白居易「七年元日、酒に對す 五首」その四(『白居易集箋校』巻三二)に、「夢得 君知るや否や、俱に本命の年を過ぐるを」(夢得は劉禹錫の字、白居易と同じ歳で、大曆七年壬子の生まれ)とある。

今年の元日は子由の生まれ年の干支と同じく「己卯」なので祝おう。彼に願うはただ過失も功劳もないことだ。来年の春になって越の地に行き、(都の)宮殿を振り返って見ればまるで夢のようだろう。

一九四〇(施三三一二五)

その三

- 1 詞鋒雖作楚騷寒 詞鋒 楚騷の寒を作すと雖も
 - 2 德意還同漢詔寬 德意 還た漢詔の寬に同じ
 - 3 好遣秦郎供帖子 好し 秦郎をして帖子を供せしめ
 - 4 盡驅春色入毫端* 盡く春色を驅って毫端に入れん
- 〔原注〕立春日翰林學士供詩帖子(立春の日、翰林學士は詩帖子を供す)

1〇詞鋒 文章や議論が、ほこさきのように鋭いこと。陳・徐陵「楊僕射に与うる書」(『徐孝穆集』巻四)に、「足下素と詞鋒に挺んで、兼ねて理窟に長す」とある。〇楚騷 『楚辭』「離騷」のこと。梁・裴子野「雕虫論」(『文苑英華』

卷七四二に、「徘徊せる芬芳の若きは、楚騷 之が祖と為す」とある。2〇徳意 天子が国民に恩徳を施す心。『周礼』秋官「掌交」に、「王の徳意・志慮を道いて、咸く王の好悪を知らしむ」とある。〇漢詔 漢帝の詔書。『後漢書』礼儀志に、「立春の日、寛大の書を下して曰く、「詔を三公に制す」とある。3〇好遣一句 秦郎は、秦観のこと。宋の朝廷では、立春など時候の節目に翰林学士らが祝賀の詩を作った。これを帖子詞と称し、詩型は五言絶句、または七言絶句が多い（清・趙翼『陔餘叢考』卷二四「帖子詞」）。王文誥は、当時の宰相呂大防には、すでに秦観を翰林院に推挙する意図があったとする。4〇毫端 筆先。〇「原注」 3句の注を参照。

言葉遣いは屈原の離騷のように敝しいけれども、今上のご恩恵には漢代の立春詔書のような寛容さがある。もしも秦観どのに祝賀の詩を書く機会をあたえるなら、無辺の春景色をすべて筆に込めて表現するだろう。

一九四一・一九四二・一九四三（施三三二・二六・二七・二八）

上元侍飲樓上三首呈同列

上元に樓上に侍飲す 三首。同列に呈す

一九四一（施三三二・二五）

その一

- | | | | | |
|---|---------|----|-------|-------|
| 1 | 澹月疏星繞建章 | 澹月 | 疏星 | 建章を繞る |
| 2 | 仙風吹下御爐香 | 仙風 | 吹き下ろす | 御爐の香 |
| 3 | 侍臣鵠立通明殿 | 侍臣 | 鵠立す | 通明殿 |

4

一朵紅雲捧玉皇

いちだのこううん　ぎやくこう
 一朵の紅雲　玉皇を捧ぐ

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○上元　旧暦正月十五日。この日の夜を元夜・元宵ともいう。家々では門戸を祭り、提灯をつるし、人々はそれを見物する。唐代以後それが習俗となり、宋代に入ると汴京の街中では鮮やかな布で装飾した提灯をつるし、前後一日ずつを加えた三日間を盛大に祝った。皇帝も自ら足を運んで観賞し、群臣に酒を飲ませたという（『宋史』礼志）。『続資治通鑑長編』元祐八年一月壬辰（十四日）の条には、「宣徳門に御し、従臣を召して灯を觀せしむ」とあり、時の天子哲宗も自らこの行事に加わっていた。

1 ○建章　漢代の宮殿の名。武帝のときに建てられ、未央宮の西、長安城外にあった（『三輔黄図』卷二「漢宮」建章宮）。のち、一般に宮殿の称となった。唐・賈至「大明宮に早朝し、両省の僚友に呈す」詩（『全唐詩』卷三三五）に、「千条の弱柳　青瑣に垂れ、百轉の流鶯　建章を繞る」とある。3 ○鵠立　鵠は鳥の名で、クグイ、ハクチョウ。鵠立とは、クグイのように首を伸ばし、足をつま立てて待ち望むこと。○通明殿　道教で、天帝の大殿のこと。「樂著作が「天慶觀の醮」に次韻す」詩（『合注』卷二〇）に、「上に通明殿に到るに因無し、只だ微かに玉珮の音を聞くを許すのみ」とあり、施注が引く『翊聖保徳伝』に以下の話を載せる。建隆年間（九六〇―六三）の初め、鳳翔府整屋県（陝西省）の民・張守真が終南山に遊んだところ、空中から彼を呼ぶ清らかな声が聞こえ、その声は自らを玉帝（天帝）の輔神と称した。ある日、守真が玉帝の大殿に朝すると、その扁額に「通明殿」とあり、香を焚いてその意味を尋ねたところ、真君が答えて、「上帝は無上の天に在り、諸天の尊と為す、万象群仙、臣たらざる者無し、常に金殿に升り、殿の光明、帝の身を照らす、身の光明、金殿を照らす、光明　通徹して、照らさざる所無し、故に通明殿と曰う」と言ったという。ここでは、天帝を天子に、通明殿を宋の宮殿に比する。4 ○玉皇　道教で、天帝のこと。3句の注を参照。

淡い月とまばらな星が宮殿をめぐり、天上の仙風が宮中の香りを吹きおろしてくる。臣下たちが通明殿に直

立して、赤い雲が聖上を取り巻いている。

一九四一(施三三二七)

その二

- 1 薄雪初消野未耕 はくせつ 初めて消えて 野 未だ耕さず
- 2 賣薪買酒看升平 薪を売り酒を買い 升平を看る
- 3 吾君勤儉倡優拙 わが君 勤儉にして 倡優拙し
- 4 自是豐年有笑聲 自らは是れ豊年にして 笑声有り

2〇売薪買酒 南唐・沈汾『続仙伝』『許宣平』『太平広記』卷二四に引く)によれば、唐の睿宗のころ、新安(河南省)のひとつ許宣平は、いつも薪の売り上げで酒を買い、酔って歌いながら帰った。その歌は、「薪を負いて朝出でて売り、酒を沽いて 日 西して帰る、路人 何処に帰るかを聞く莫かれ、白雲に穿ち入りて翠微に行かん」というものだった。3〇勤儉 仕事に勤めて暮らしをつつましやかにする。勤勉儉約。〇倡優拙 倡優は、わざおぎ。役者。『史記』范雎蔡沢列伝に、「秦 昭王曰く、「吾れ聞く、楚の鉄劍は利くして倡優は拙し」と。夫れ鉄劍利ければ則ち士は勇に、倡優拙ければ則ち思慮は遠し」とある。

うっすらと積もった雪が融けたばかりで、田畑はまだ耕されず、(庶民たちは)たぎぎを売って酒を買うなどして太平のさまが見られる。わが陛下は勤勉かつ儉約なので俳優の技倆が拙くとも、豊年だからこそ笑い声があるのだ。

一九四三（施三三二一八）

その三

- 1 老病行穿萬馬羣 老病 行くゆく穿つ 万馬の群
 2 九衢人散月紛紛 九衢 ひと 散じて 月 紛紛たり
 3 歸來一盞殘燈在 歸來来たれば 一盞 殘燈在り
 4 猶有傳柑遺細君 猶有伝柑の細君に遺る有り

〔原注〕侍飲樓上則貴戚爭以黃柑遺近臣謂之傳柑聽攜以歸蓋故事也（樓上に侍飲すれば、則ち貴戚争つて黄柑を以て近臣に遺る。之を伝柑と謂い、携えて以て歸るを聽す。蓋し故事なり）

2〇九衢一句 九衢は、都の九つの大路。衢は、四達の道。杜甫「鄭広文に陪して何將軍の山林に遊ぶ 十首」〔杜詩詳注〕卷二〇その九に、「綺衣 羅薛に掛く、涼月 白くして紛紛たり」とある。白居易「雪雨り朝を放つ、因つて微之を懷う」詩〔白居易集箋校〕卷一四に、「婦騎 紛紛として九衢に満つ、放朝三日 泥塗の為なり」とある。

3〇殘燈 燃え尽きかけたともしび。白居易「秋房の夜」詩〔白居易集箋校〕卷一九に、「水窓 席 冷ややかにして 未だ臥する能わず、殘燈を挑て尽くして 秋夜長し」とある。4〇猶有一句 細君は前漢の東方朔の妻の名。のち、自分の妻の謙称。『漢書』東方朔伝によれば、夏日、武帝が群臣に肉を食させたところ、東方朔が剣で肉を切り、持って帰つたと告発された。武帝に責められた東方朔は「帰つて細君に遺る、又た何ぞ仁なるや」と答えた。〔原注〕故事は、もともとつた昔の事柄、前例。『漢書』劉向伝に、「是の時、宣帝 武帝の故事に循い、名儒俊才を招選して左右に置く」とある。

老いて病気がちな私は大勢の車馬の間を縫って出かけて行き、いま都大路では人が散じて、あちこちに月の

光が照り映えている。家に帰ったら明かりがぼつんと灯っており、幸いに賜りもののみかんを妻にあげられた。

(担当 蔡毅)

一九四五(施三三二二八)

送蔣穎叔帥熙河并引

蔣穎叔が熙河に帥たるを送る 并びに引

穎叔出使臨洮、軾與穆父仲至同餞之、各賦詩一篇、以「今我來思」爲韻、致邁歸之意。軾得「我」字。穎叔出でて臨洮に使用し、軾穆父・仲至と同一に餞す、各おの詩一篇を賦す、「今我來たり」を以て韻と爲し、邁歸の意を致す。軾は「我」の字を得たり。

元祐八年(一〇九三)、五十八歳の作。時に都の開封(河南省)に在った。

○蔣穎叔 蔣之奇のこと。穎叔はその字。『蘇軾詩注解(二十四)』に収める作品番号一九〇六の詩題の注を参照。○帥熙河 帥は、率いること。熙河は、熙州・河州。熙河路。西夏の南辺と境を接する一帯。今の甘肅省蘭州市と青海省西寧市の中間地帯。この前年(元祐七年)十月、蔣穎叔は知熙州に任命された。『蘇軾詩注解(二十六)』に収める作品番号一九三一の詩に「今朝安西の守、来たつて陽関の曲を聴く」と詠じられる。その注を参照。○臨洮 臨洮は、臨洮城。熙州・河州の南方にある。○穆父 錢懿のこと。穆父はその字。『蘇軾詩注解(三三)』に収める作品番号一六一六の詩題の注を参照。○仲至 王欽臣のこと。仲至はその字。『蘇軾詩注解(二)』に収める作品番号一六〇二の詩題の注を参照。○今我來思爲韻 今我來思は、『詩経』小雅(鹿鳴之什)「采薇」第六章の、兵士の出征と帰還とをうたった一句に「昔我れ往く、楊柳依依たり、今我れ來たり、雨雪霏霏たり」(「思」は、語調をととのえるために句末に置かれる助字)とあり、詩の小序に「采薇は、戍役を遺るなり」とある。蔣穎叔を送別する席で、同座の

者三名（蘇軾・錢勰・王欽臣）に「今我来思」のうち助字の「思」を除く一字ずつを詩の韻として配って詩を作ることになり、蘇軾は「我」（上声二十等）を韻として配られた。本詩の第2句の韻に「我」が配されている。分韻の詩の作法については『蘇東坡詩集』第二册一三頁を参照。○過 速やかなこと。『詩経』鄘風「相鼠」に「人にして礼無くば、胡ぞ過やかに死せざる」とあり、毛伝に「過は、速なり」とある。

穎叔が知事として臨洮に赴くこととなり、私は、穆父・仲至とともに送別の宴を催した。それぞれ詩一篇を作り、『詩経』の「今我来思（今 我れ来たり）」を分韻して、早く帰還できるようにという願いを伝えた。私は「我」の韻で詠じることとなった。

1 西方猶宿師

西方 猶お師を宿すも

2 論將不及我

將を論じて我に及ばず

3 苟無深入計

苟くも深く入るの計無くして

4 緩帶我亦可

緩帯ならば我も亦た可なり

5 承明正須君

承明 正に君を須うれば

6 文字粲藻火

文字 藻火粲たり

7 自薦雖云數

自ら薦むること云に數しばすと雖も

8 留行終不果

行を留むること終に果たさず

9 正坐喜論兵

正に喜んで兵を論ずるに坐せられ

10 臨老付邊鎖

老いに臨んで邊鎖に付せらる

11 新詩出談笑

新詩 談笑に出だして

- 12 僚友困掀箴
僚友 掀箴に困しむ
我れ林杜を歌わんと欲す
楊柳方婀娜
邊風事首虜
所得蓋么麼
願爲魯連書
一射聊城箭
陰功在不殺
結草酬魏顙
- 13 僚友 掀箴に困しむ
我れ林杜を歌わんと欲す
楊柳 方に婀娜たり
邊風 首虜を事とするも
所得 所は蓋し么麼
願わくば魯連が書を為して
一たび聊城の箭を射ん
陰功は殺さざるに在り
草を結んで魏顙に酬う
- 14 僚友 掀箴に困しむ
我れ林杜を歌わんと欲す
楊柳 方に婀娜たり
邊風 首虜を事とするも
所得 所は蓋し么麼
願わくば魯連が書を為して
一たび聊城の箭を射ん
陰功は殺さざるに在り
草を結んで魏顙に酬う
- 15 僚友 掀箴に困しむ
我れ林杜を歌わんと欲す
楊柳 方に婀娜たり
邊風 首虜を事とするも
所得 所は蓋し么麼
願わくば魯連が書を為して
一たび聊城の箭を射ん
陰功は殺さざるに在り
草を結んで魏顙に酬う
- 16 僚友 掀箴に困しむ
我れ林杜を歌わんと欲す
楊柳 方に婀娜たり
邊風 首虜を事とするも
所得 所は蓋し么麼
願わくば魯連が書を為して
一たび聊城の箭を射ん
陰功は殺さざるに在り
草を結んで魏顙に酬う
- 17 僚友 掀箴に困しむ
我れ林杜を歌わんと欲す
楊柳 方に婀娜たり
邊風 首虜を事とするも
所得 所は蓋し么麼
願わくば魯連が書を為して
一たび聊城の箭を射ん
陰功は殺さざるに在り
草を結んで魏顙に酬う
- 18 僚友 掀箴に困しむ
我れ林杜を歌わんと欲す
楊柳 方に婀娜たり
邊風 首虜を事とするも
所得 所は蓋し么麼
願わくば魯連が書を為して
一たび聊城の箭を射ん
陰功は殺さざるに在り
草を結んで魏顙に酬う
- 19 僚友 掀箴に困しむ
我れ林杜を歌わんと欲す
楊柳 方に婀娜たり
邊風 首虜を事とするも
所得 所は蓋し么麼
願わくば魯連が書を為して
一たび聊城の箭を射ん
陰功は殺さざるに在り
草を結んで魏顙に酬う
- 20 僚友 掀箴に困しむ
我れ林杜を歌わんと欲す
楊柳 方に婀娜たり
邊風 首虜を事とするも
所得 所は蓋し么麼
願わくば魯連が書を為して
一たび聊城の箭を射ん
陰功は殺さざるに在り
草を結んで魏顙に酬う

1〇西方一句 西方は、宋と西夏との辺境一帯を指し、詩題に見える熙河を含む。宿は、長く留まること。『漢書』韓安国伝に「孝文 兵の宿すべからざるを寤る」とあり、顔師古の注に「宿は、久しく留まるなり」とある。一句は、西夏との辺境防備のために軍隊が駐留する情勢が長く続いていることを述べている。3〇深入 敵地に深く攻め入ること。『漢書』李陵伝に「武帝以て(李) 広の風有りと為し、将八百騎をして、深く匈奴に入らしむること二千余里」とある。4〇緩带一句 緩带は、带をゆるめる。くつろぐさま。『春秋穀梁伝』文公十八年に「一人に子有れば、三人緩带なり」とある。一句は、もし西夏との関係に差し迫った心配がなくのみびりした情勢ならば、自分(蘇軾)でも西辺守備の任は務まるだろうということを述べる。5〇承明 承明廬のこと。漢代、宮殿のそばにあって、近臣の宿直する場所であった。蘇軾「錢藻が出てて婺州に守たるを送る、英の字を得たり」詩(『蘇東坡詩集』第二册四八頁)の注を参照。ここでは朝廷をいう。6〇文字一句 文字は、詩文。藻火は、水藻や焰の文様。藻や焰を圖案化して衣服に刺繍したもの。『尚書』益稷に「宗彝、藻火、粉米、黼黻、絺繡」とあり、孔伝に「藻は水草の文有る者なり。

火は火宇たり」とある。一句は、蔣穎叔の詩文が見事で鮮やかであることを述べる。78〇自薦・留行二句 二句は、蘇軾が蔣穎叔を朝廷の任に与かるべき人物として推してきたが果たせず、熙州への赴任を止められなかったと述べる。『四河入海』卷二の二に引く一韓智翊の聞書に「自(ノ)字ハ、坡自(ラ)ナリ」とあり、また「我レ此(ノ)間、天子へ書ヲ献納シテ数シバ穎叔ハ朝廷宗廟ノ上ニアラバヨカラン人也ト申セドモ、其ノ言用(イ)ラレズシテ、遂ニ熙河二赴(ク)程ニ、行ヲ留(ムレ)ドモ終ニ果タサズシテ、ユカルゾ」とある。7句の雖を誰に作るテキストもあり、その場合は「自ら薦むること誰ぞ云に数しばせん」と訓読し、蔣穎叔が自らを朝廷に薦めるという意となるが、今、この説は取らない。瑞溪周鳳の説に「今穎叔自薦せざるなり」とある。910〇正坐・臨老二句 臨老は、老境に入らんとすること。蔣穎叔の生年は天聖八年(一〇三二)、この時、六十三歳であった。辺鎖は、辺境の要所の意か。鎖を瑣に作るテキストもあるが、瑣と鎖は通じる。二句は、蔣穎叔が、老境に入って西の辺境熙州の知事に任じられたのは、蔣穎叔が日頃、好んで軍事を論じるのが災いしたのだと述べる。瑞溪周鳳の説に「此(ノ)以下ノ二句、言(フココロ)ハ、穎叔平生喜ンデ兵事ヲ論ズ、此ニ坐シテ遂ニ辺塞ヲ授ケラルルナリ」とある。11〇新詩一句 新詩は、作ったばかりの詩。蘇軾の詩には、しばしば新詩という語が見える。『蘇軾詩注解(十六)』に収める作品番号一八一七の詩の注を参照。一句は、蔣穎叔が談笑の間いたやすく詩を作ることを述べる。12〇掀箴 あおりあげる。韓愈「灑吏」詩(『韓昌黎集』卷六)に、「颶風時有って作り、掀箴真に事を差う」とある。また、蘇轍「飲酒量を過して肺疾復た作る」詩(『欒城集』卷一〇)に「歌吟嘲諷を雑え、笑語掀箴を争う」とある。13〇我欲一句 杖杜は、凱旋を勞う歌。『詩経』小雅の詩篇の名で、その小序に「役より還るを勞うなり」とある。一句は、西の最前線の知事に赴く蔣穎叔を遠征に赴く兵に擬して、任を終えて都へ帰還する際には、慰勞の歌を歌いましょうと述べて、その無事を祈っている。14〇楊柳 やなぎの総称。旅立つ人を送る時に、柳の枝を手折って手渡すならわしがよく知られるのをはじめ、本詩の引の注に引く『詩経』「采芣」の詩に楊柳が歌われるように、古来、楊柳は旅立ち(別離)の情景を象徴する。〇婀娜 しなやかで美しいさま。白居易「嚴十八郎中郡に在りし日、東南の楼を改め制して、因りて清輝と名づく。……」詩(『白居易集箋校』卷八)に「院柳烟婀娜たり、簷花雪霏微たり」

とある。15〇辺風 辺境の風。北齊の蕭愨「上之回」(『文苑英華』卷二二〇)に「朔路 清警を伝え、辺風 画旒を巻く」とある。また、李白「白鷹を放つを觀る 二首」その一(『李太白全集』卷二四)に「八月 辺風高く、胡鷹 錦毛白し」とある。○首虜 首級と捕虜。捉えた敵の数。『荀子』儒効篇に「蓋し(紂を)殺す者は周人に非ず、殷人に囚るなり。故に首虜の獲無く、踏難の賞無し」とある。16〇公麼 微小なこと。班彪「王命論」(『文選』卷五二)に「又た沈んや么麼 数子に及ばず、而も天位を闇干せん」と欲する者をや」とあり、その李善注に引く『通俗文』に「長ならざるを么と曰い、細小を麼と曰う」とある。17 18〇願為・一射二句 魯連は、齊の魯仲連のこと。魯仲連は、齊の聊城に立て籠った燕の軍隊に向けて、書簡を矢につかねて送った。その書簡を読んだ燕将が自決した後、齊の田単が聊城を奪還した(『史記』魯仲連伝)。筈は、やがら。二句は、矢につかねて送った書簡が、籠城を破るきっかけを作ったように、膠着した局面を交渉によって打開する方法を、蘇軾が蔣穎叔に勧めている。二句及び二句に続く19 20句は、15 16句で、辺境の運営において成果と見なされがちな武力で敵を圧倒する方法を、取るに足らぬものとした見方と通底している。19 20〇陰功・結草二句 不殺は、人を殺さないこと。『周易』繫辭伝上に「古の聡明叡知、神武にして殺さざる者か」とある。二句は、春秋の魏顆の故事を踏まえ、人を殺さずして生かしたなら、他日、よい結果をもたらして功績となるだろうと、蘇軾が蔣穎叔に勧めている。蘇軾「蔡冠卿が饒州に知たるを送る」詩(『蘇東坡詩集』第二册二二三頁)の注を参照。

西辺では依然として軍の駐留が続いており、將軍の人選をするにも私などは候補にもされません。西のかた敵地の奥深くまで攻め入ろうとの計略もなく、情勢が落ち着いて安泰なら、私でも務まるのでしようが。

朝廷の承明殿ではあなたを必要としています、その文章の水藻や焰の文様をおりなすような見事さを。私はあなたを朝廷で活躍すべき人物としてたびたび推してきましたが、都に引き留めておくことはついにできませんでした。あなたが好んで軍事を議論なさるのが災いしたのですよ、老境に入って辺境要害の地に遣わされるとは。あなたが新たな詩を談笑の間にささっと作って寄こされるので、仲間たちはそれに和するのにあたふた

しています。

はやくあなたのご帰還を勞う「林杜」の詩を歌いたいものです、今まさに楊柳がしなやかにそよいであなたを見送っていますよ。辺境のきびしい風の中では、敵の首の数がすべてとされますが、それで得られるのはせいぜいちっぽけな戦果です。どうか魯仲連の書簡が、一矢に託して放つだけで聊城の武装を除かせたように、交渉による解決をめざされよ。陰徳というものは人命を奪わないことこそ積むものです、魏顆の徳が結び草によって報いられたように、必ず頭らかに報われることでしょう。

（担当 原田直枝）

一九四六・一九四七（施三三・二九・三〇）

再送 二一首

再び送る 二一首

一九四六（施三三・二九）

その一

- 1 使君九萬擊鵬鯤
- 2 肯爲陽關一斷魂
- 3 不用寬心九千里
- 4 安西都護國西門

使君しやくん 九万きゅうまん 鵬鯤ほうこん 擊うち
 肯あえて陽關やうかんの爲ために一ひとたび魂たましいを断たたれんや
 心こころを九千里きゅうせんりに寛あまがするを用もちいず
 安西あんせいの都護とごは国くにの西門せいもん

元祐八年（一一〇九三）、五十八歳の作。

○再送 蔣之奇（字は穎叔）が熙州へ知事として赴くのを送るに際し、かさねて作られたものである。前の詩（作品番号一九四五）の詩題の注を参照。蔣之奇については、作品番号一九〇六「蔣穎叔・錢穆父が景靈宮に従駕するに次韻す 二首」その一（『蘇軾詩注解（二三四）』）の詩題の注を参照。

1 ○使君一句 使君は、天子の使として熙州へ赴く蔣之奇を指す。鵬鯤は、『莊子』逍遙遊篇にみえる何千里あるかわからないほどの大魚の鰓と、それが変身し九万里の高みに舞い上がる大鳥の鵬のこと。蘇軾「試官の考較を促して戯れに作る」詩（『蘇東坡詩集』第二冊三五〇頁）に「鯤鵬 水に撃つ 三千里、組練 長く駆る 十万夫」と錢塘江の潮の勢いを表わしている。ここでも蔣之奇が辺境の地へ向かう勢いのほどを示す。2 ○陽関 陽関三疊と称される別れのうた。「孫莘老が贈らるるに次韻す……」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊五二二頁）を参照。蘇軾には「陽関の詞 三首」（『蘇東坡詩集』第四冊三〇六頁）もある。3 ○寛心 心をゆったりとくつろげること。杜甫「惜しむ可し」詩（『杜詩詳注』巻一〇）に「心を寛げるは応に是れ酒なるべく、興を遣るは詩に過ぐるは莫し」とある。○九千里 都から安西までの距離をさす。白居易「西涼の伎」詩（『白居易集箋校』巻四）に「平時の安西は万里の疆 今日の辺防は鳳翔に在り」という。また九千里という数字は、宋玉「楚王の問いに對う」（『文選』巻四五）に「故に鳥に鳳有りて、魚に鯢有り、鳳皇 上九千里に撃ち、雲霓を絶ち、蒼天を負い、杳冥の上に翱翔す」とあるように、鳳凰が飛翔するはるかな距離の意にも使われており、第一句と結びつけて蔣之奇の任地に赴く勢いを表現したとも考えられる。4 ○安西一句 安西都護は、新疆のクチャのあたりに置かれた辺境の地を治める役所。『通典』巻三二「大唐の永徽中に、始めて辺方に於て安東・安西・安南・安北の四大都護府を置く」（永徽は、六五〇―六五五）とある。蔣之奇の向かう熙州はいまの甘肅省の蘭州の南の地であるが、辺境の地ということで安西に擬えている。

天子の命を奉じたあなたは九万里もの高みを飛翔する鵬のような勢いで、どうして陽関の曲を聞いて断腸の思いになることなどありませんや。

ゆめゆめ九千里のかなたなどと心を緩められませぬよう、安西の都護府は国の西のまもりの門なのですから。

一九四七（施三三二〇）

その二

- 1 餘刃西屠横海鯤 余刃よじん西にしのかた 海うみに横よこたわる鯤こんを屠ほぶらん
- 2 應余詩讖是游魂 余よが詩し讖しんにおうじて是これ游ゆう魂こん
- 3 歸來趁別陶弘景 帰かえり来きたらば 別わかれを陶とう弘こう景けいに趁おつて
- 4 看掛衣冠神武門 衣冠いかんを神武門しんぶもんに掛かくるを看みん

1〇余刃 優れた能力をもっていて、仕事に余裕があること。『莊子』養生主篇に「彼の節なる者には間有りて、刃なる者には厚さ無し。厚さ無きを以て間有るに入るれば、恢恢乎として其の刃を遊ばすに必ず余地有り」とある。

〇西屠 李白「王十二の寒夜独酌して懐う有るに答う」詩（『李太白全集』卷一九）に、唐の玄宗皇帝の將軍であつた哥舒翰が西方の吐蕃の侵入を防いで功を立てたことを「君 哥舒が青海に横行して夜刀を帯び、西のかた石堡を屠りて紫袍を取りしを学ぶ能わず」と詠じる。蘇軾「東陽の水榭亭」詩（『蘇東坡詩集』第三冊五一頁）も参照。ここでは西のかた熙州の地で蔣之奇が夷狄の攻略に華々しい活躍をすることをいう。〇横海鯤 海をふさぐような鯨のスケールの大きさを表現している。蘇軾は「願わくは空手を持し去りて、独り横江の鯨を控せんことを」と「蹇道士拱辰に留別す」詩（『蘇軾詩注解（十二）』）でも、横江という言葉で、河川を塞ぐほどの鯨の巨体を詠じている。2〇 応余一句 詩讖は、詩の言葉が、後日起こることの前兆となるのをいう。ここでは、元祐七年に蘇軾が「蔣穎叔・錢穆父が景畫宮に従駕するに次韻す 二首」その二（『蘇軾詩注解（二十四）』）に「首を回らせば鸚鵡行人傑有り、坐ながら知る 羌虜は是れ遊魂なることを」と詠じたことが、魂が身体を抜け出して浮遊するような、蛮族どもの息絶

え絶えの状況をすでに予言していたとする。340 帰来・看掛二句 『南史』陶弘景伝に「永明十年、朝服を脱ぎて神武門に掛け、表を上りて祿を辞す。詔ありて之を許さる」とある。蘇軾は自らを官を辞して茅山に隠棲した陶弘景（四五六一―五三六）に擬えている。

西方に行かれたあなたは海をふさぐほどの鯢をやすやすと切り裂くことだろう、我が詩の予言通り、はや敵は虫の息。

帰還なさって、いそぎわたしを見送りに来られたなら、陶弘景のように衣冠を神武門にひっかけて退くさまをご覧になることでしょう。

一九四八（施三三―三二）

次韻穎叔觀燈

穎叔が燈を觀るに次韻す

- 1 安西老守是禪僧
安西の老守は是れ禪僧
- 2 到處應然無盡燈
到處 心に無盡燈を然すべし
- 3 永夜出游從萬騎
永夜出游して万騎を從え
- 4 諸羌入看擁千層
諸羌入りて見て 千層を擁せん
- 5 便因行樂令投甲
便ち行樂に因つて甲を投せ令め
- 6 不用防秋更打冰
用いず 秋を防ぎ 更に氷を打つを
- 7 振旅歸來還侍宴
振旅 歸り來たつて還た宴に侍せば

8 十分宣勸恐難勝

十分じゅうぶんの宣勸せんかん 恐らくは勝たえ難がたからん

一八

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○穎叔 蔣之奇（一〇三一—一一〇四）のこと、穎叔はその字。蔣之奇については、作品番号一九〇六「蔣穎叔・錢穆父が景靈宮に従駕するに次韻す 二首」その一（『蘇軾詩注解（二十四）』）の詩題の注を参照。○觀燈 旧曆正月十五日、一年の最初の望月の日で、さまざまな燈籠を飾りしつらえて祝う。『東京夢華録』には、開封府におけるこの日の賑わいが記載されている。本詩から読み取れるように、蔣子奇が知事として赴任した熙州（甘肅省）でも、夜を徹して行楽がなされていたと考えられる。

1 安西老守 熙州へ知事として赴任した、蘇軾より五歳年長の蔣之奇をいう。安西は新疆のクチャあたりの地をいうが、蘇軾は辺境の地である熙州（甘肅省）を安西に擬えて詠じている。作品番号一九四六の詩の注を参照。2 〇無尽燈 一燈でもって次々に衆燈を燃すように、一人が仏法をもって多くの人を教化すること。『維摩經』菩薩品（『大正藏』第一四卷）にみえる維摩の言葉に依る。蘇軾「軾 石を以て画に易えんと欲す……」詩（『蘇軾詩注解（二十六）』）の注を参照。3 〇万騎 一万の騎兵、きわめて多くの騎兵をいう。蘇軾「喬將きやうまさに行かんゆとし、鵝鹿がろくを烹に……」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊八四頁）を参照。4 〇諸羌 羌は、西方の異民族。擁千層は、幾重にも群がり集まるさま。蘇軾「八月十七日、復た望海樓に登り、自ら前篇に和す……五首」その三（『蘇東坡詩集』第二冊三五五頁）では、「乱山 曉あけを遮りて 千層を擁す、睡り美にして 初涼 撼ゆがせども鷹たかえず」と、無数の山々が重なり合うさまを詠じている。5 〇投甲 甲よろいを脱ぎ捨てて投降すること。韓愈「淮西を平らぐる碑 并びに序」（『韓昌黎集』卷三〇）に「蔡の卒夫は、甲よろいを投じて呼舞よぶます」とある。6 〇防秋 秋になると辺境地帯では收穫をねらう夷狄との戦いが多くなるため、防備を強化することをいう。『旧唐書』陸贄伝に「又た河・隴を以て蕃あそびを陥おとしれしより已来、西北の辺は常に重兵を以て守備せしめ、之を防秋と謂う」とある。杜甫「雨に対す」詩（『杜詩詳注』卷二二）に「雪嶺 防秋急ぼうしゅうにして、繩橋 戰勝遲せんしょうし」とある。○打水 冬季に敵の侵入を防ぐために、河に張った水を割っておくこと。『北史』斛律光伝

に「初め、文宣の時、周人 常に齊兵の西に度るを懼れ、恒に冬月を以て、河を守り氷を椎く」とある。7〇振旅軍容を整えること。『詩経』小雅（南有嘉魚之什）「采芣」詩に「鼓を伐つこと淵淵たり、旅を振るわすこと闐闐たり」とある。8〇宣勸 皇帝より酒を賜ること。『蘇軾詩注解（二十五）』に収める作品番号一九一八の詩の注を参照。

安西の老知事どのは禪僧のように、赴任の地で一燈によって万人の心を照らされます。夜おそくまで観燈の遊興には多くの騎兵を付き従え、それを見物しようとする蛮族どもが幾重にも囲んでにぎわいます。

そして行楽によって蛮族の武装を解かせれば、秋の侵攻への備えも冬の防御も要りません。凱旋されたら天子の宴に招かれて、おそらくいただき尽くせぬほどのたっぷり酒食がふるまわれることでしょう。

（担当 中 純子）

一九四九（施注三三—三二）

次韻王晉卿奉詔押高麗宴射

王晉卿が詔を奉じて高麗の宴射を押るに次韻す

- | | | |
|---|---------|-------------------|
| 1 | 北苑傳呼陸楯郎 | 北苑 伝呼す 陸楯の郎 |
| 2 | 東夷初識令君香 | 東夷 初めて識る 令君の香 |
| 3 | 天山自可三箭取 | 天山 自ら三箭もて取る可し |
| 4 | 海國何勞一葦杭 | 海國 何ぞ一葦もて杭を勞せん |
| 5 | 宣勸不辭金盃側 | 宣勸 金盃の側つるを辭せず |
| 6 | 醉歸爭看玉鞭長 | 酔いて歸らば争いて玉鞭の長きを見ん |

- 7 錦囊詩草勤收拾 錦囊の詩草 勤めて收拾せよ
8 莫遣雞林得夜光 雞林をして夜光を得さしむる莫かれ

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○王晉卿 王誥のこと。晉卿はその字。「王晉卿 煙江疊嶂図を作す。……」詩（『蘇軾詩注解（一）』）の詩題の注を参照。○高麗宴射 朝貢してきた高麗の使節をもてなすために催す弓射と酒宴。宴の字を宋本施注は同音同義の燕に作っている。『東京夢華錄』卷六「元旦朝会」に、遼の使節について、「次日「正月三日」、南御苑に詣りて弓を射る。朝廷 旋ち射を能くする武臣を選んで伴射せしめ、彼れに就きて宴を賜る」と述べる。高麗の使節も北の御苑で同様の宴射を行ったと思われる。王晉卿のもの詩は伝わらないが、范祖禹にも王晉卿に和した「王都尉が高麗人の宴射を北園に押るに和す」詩（『全宋詩』卷八八八）がある。

1 ○北苑 宮中の北にある御苑。○伝呼 つぎつぎに伝え呼ぶ。杜甫「晩れに左掖より出づ」詩（『杜詩詳注』卷六）に「昼刻 伝呼浅く、春旗 簇杖斉し」とある。○陞楯郎 楯を持って皇帝の警護に当たたる兵士。『史記』滑稽列伝に、「優旃 檻に臨んで大呼して曰く、「陞楯郎」と、郎曰く「諾」と、優旃曰く、「汝は長しと雖も何の益かある、幸いにして雨に立てり、我は短しと雖も幸いにして休居す」とある。2 ○東夷 東方の異民族。本詩では高麗を指す。○令君香 『太平御覽』卷七〇三に引く『襄陽記』に、「劉和季曰く、「苟令君 人家に至らば、坐する処は三日香れり」と」とある。王維「春日に門下省に直して早に朝す」詩（『王右丞集』卷二二）には、「遥かに聞く 侍中の佩、暗かに識る 令君の香」とある。本詩では王晉卿を苟令君になぞらえている。3 ○天山一句 天山は新疆を南北に分かつ山脈。『旧唐書』薛仁貴伝に、「軍中歌いて曰く、「將軍は三箭もて天山を定め、戰士は長歌して漠関に入る」と」とある。4 ○海国 高麗を指す。○一葦杭 一葦は小舟。杭は航と同じく海をわたること。『詩経』衛風「河広」に、「誰か謂う 河は広しと、一葦もて之を杭る」とある。5 ○宣勸 宮中の酒宴で酒を賜ること。「王仲至が「雪を（御筵）に喜ぶ」に次韻す」詩（『蘇軾詩注解（二十五）』）の注を参照。○金盃 金製の碗。杜甫「楊六判官の西蕃に使

するを送る」詩（『杜詩詳注』巻五）に、「辺酒 金碗を排べ、夷歌 玉盤を捧ぐ」とある。○側 そはだてる。（酒の注がれた碗を）傾けること。6○玉鞭 玉を嵌めこんだ美しい鞭。杜甫「岳州賈司馬六丈と巴州嚴八使君兩閣老に寄す 五十韻」（『杜詩詳注』巻八）に、「貔虎は金甲を開き、麒麟は玉鞭を受く」とある。7○錦囊 錦で作ったふくろ。李商隱「李賀小伝」（『李義山文集』巻四）に、「恒に小奚奴を従え、疲驢に騎り、一の古く破れし錦囊を背にす。偶たま得る所有らば、即ち書して囊中に投ず」とある。○詩草 詩の下書き。8○鷄林 鷄林は新羅の別名。本詩では、高麗の使節が来朝して書籍を買いあさることを新羅の商人になぞらえている。『新唐書』白居易伝に、「居易文章に於いて精切たり、最も詩に工にして、……数千篇に至り、当時の士人 争いて伝う。鷄林の行賈は其の国相に倍り、率篇を一金に易う。其の偽なる者は、相 輒ち能く之を弁かつ」とある。○夜光 夜のやみの中でも光る璧や珠。『史記』鄒陽伝に、「明月之珠・夜光之璧も、暗を以て人に道路に投ずれば、人の剣を按じて相 眇さる者無きは、何となれば則ち因無くして前に至ればなり」とある。本詩では、王晉卿の詩のすばらしさをこれに喩えている。

宴射（酒宴と弓射）がおこなわれる北苑では、皇帝の警護に当たる士を呼ばわる声が物々しく響き渡り、高麗の使節らはそこでようやく晉卿どのの人物ぶりを知ることとなりました。西のかた天山一帯は（かつて薛仁貴が）僅か三本の矢で平定しましたが、すぐ東にある高麗は小舟で出向くまでもなく向こうから朝貢してきました。

射を終えた後の宴席では、晉卿どのの労をねぎらって賜る御酒を辞退せずに召し上がり、酔ってお帰りになる時には、見事な鞭を持って馬にまたがるお姿を街の人びとが争って見物することでしょう。お作りになった詩は錦の囊に大切にしまっておいて、ご高作を高麗の（無知な）商人どもに持ち去られないようになさってください。

一九五〇（施注三三—三三）

次韻錢穆父王仲至同賞田曹梅花

錢穆父・王仲至が同に田曹の梅花を賞つるに次韻す

- 1 寒廳不知春
 寒庁 春を知らず
 獨立耿玉雪
 獨立して玉雪耿たり
 2 閉門愁永夜
 門を閉ざして永夜を愁い
 3 置酒及明發
 置酒して明發に及ぶ
 4 忽驚庭戶曉
 忽ち驚く 庭戸の暁くるに
 5 未受煙雨沒
 未だ煙雨の没するを受けず
 6 浮光風宛轉
 光を浮かべて 風宛転として
 7 照影水方折
 影を照らして 水方折す
 8 鬢霜未易掃
 鬢霜 未だ掃い易からず
 9 眉斧眞自伐
 眉斧 眞に自ら伐る
 10 惟當此花前
 惟だ當に此の花の前に
 11 醉臥黃昏月
 酔いて黃昏の月に臥すべし
 12

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○錢穆父 錢黜のこと。穆父はその字。「錢越州に次韻す」詩（『蘇軾詩注解（三三）』）の詩題の注を参照。○王仲至 王欽臣のこと。仲至はその字。「葉公兼・王仲至和せらる、次韻して之に答う」詩（『蘇軾詩注解（一一）』）の詩題の注

を参照。○田曹 工部に属して農事を管掌する役所。『通典』職官の工部尚書の条にみえる屯田郎中一人の杜注に、「晉に至り始めて屯田尚書有り、太康中に及んで之を田曹と謂う」とある。錢・王のもの詩は伝わらない。

1○寒庁 ひっそりとした官舎。韓愈「張徹に答う」詩（『韓昌黎集』巻二）に、「勤め来たりて晤語するを得ん、憚ること勿かれ 寒庁に宿するを」とある。2○独立 梅が一本だけぽつんと立っているさま。○玉雪 真っ白で美しい雪。蕭統「錦帯に十二月を書する啓」（黄鐘十二月）（『昭明太子集』巻三）に、「彤雲は四面の葉を垂れ、玉雪は六出の花を開く」とある。4○置酒 酒盛りをすること。陶淵明「五柳先生伝」（『陶淵明集』巻五）に、「親旧 其の如くなるを知り、或いは置酒して之を招く」とある。○明発 夕べから朝まで。『詩経』小雅（小宛之什）「明発」詩に、「明発 寐ねられず、二人を懐う有り」とあり、その鄭箋に、「明発は夕べに発して明に至る」とある。6○煙雨 けむるよう降る細かい雨。杜牧「江南の春 絶句」詩（『樊川文集』巻三）に、「南朝四百八十寺、多少の樓台 煙雨の中」とある。7○浮光 水面に反射した光。駱賓王「秋月」詩（『駱賓王文集』巻五）に、「漏彩 疎薄を含み、浮光 急瀾に漾う」とある。○宛転 女性の眉がゆるやかに美しく曲がるさま。白居易「長恨歌」（『白居易集箋校』巻一一）に、「六軍発せず 奈何ともする無く、宛転たる娥眉 馬前に死す」とある。本詩では、白い梅花が風にたおやかに揺れるさまと解する。8○水方折 水が急に向きを変えて（直角に）流れること。『淮南子』墜形訓に、「水の円折する者は珠有り、方折する者は玉有り」とある。白居易「玉水は方流すと記せる詩」（『白居易集箋校』巻三八）に、「孚尹して 光 灑灑たり、方折して 浪 悠悠たり」とある。9○鬢霜一句 鬢霜は、びんの毛の白いこと。白居易「啄木の曲」（『白居易集箋校』巻二二）に、「我に両鬢の霜有り、君の銷す得ざるを知る」とある。掃は、取り除くこと。杜甫「丈人山」詩（『杜詩詳注』巻二〇）に、「白髪を掃除するに黄精在り、君看よ 他時 氷雪の容」とある。一句は、若返るのが難しいことをいう。10○眉斧一句 枚乗「七発」（『文選』巻三四）に、「皓齒・娥眉は、命けて性を伐るの斧と曰う」とある。皓齒・娥眉は、女性の美しさを象徴するもの。一句は、美しい女性と戯れるのは男性の寿命を縮めるものであることをいう。12○醉臥 酔い倒れる。李白「妓を携えて梁王の棲霞山の孟氏桃園に登る」詩（『李太白文集』巻二〇）に、「分明にして感激す 眼前の事、惜しむ莫し 醉臥す 桃園の東」

とある。○黄昏月 林逋「山園の小梅 二首」その一（『林和靖先生詩集』卷二）に、「疎影 横斜して 水は清浅、
暗香 浮动して 月は黄昏」とあり、梅花の影が水に映じ、香りが黄昏の月の中に漂うさまを詠じている。

人氣もなく寒々とした官舎には春の気配もまだないようですが、ひとり梅の樹だけが玉のような白い花を咲かせています。門を閉ざして宿直をなさる御身には夜は長く、お役目が終わる明け方まで酒を酌み交わされておられますよう。

気がつけば夜が明けていて庭を見やれば、梅が霧雨の中でも毅然と花をつけています。花の光は風を受けてゆらゆらと舞い、花の影は急に折れ曲がる水の流れに映じていることでしょう。

わたしの両の鬢に生えた白髪はもはやどうにもならず、この齢で美女と戯れるのは自らの身体をそこなうようなものです。ですから（美女の代わりに）この田曹の梅花を前にして、黄昏どきの月のもとで酔っ払って寝ているのがいいのでしょうか。

（担当 中 裕史）

一九五二（施三三―三四）

送襄陽從事李友諒歸錢塘

襄陽じょうようの從事じゆうじ李友諒りゆうりょうが錢塘せんとうに帰かえるをおく送おくる

1 居杭積五歲

杭こうに居まゐりて五歲ごさいを積つむ

2 自意本杭人

自みづから意おもう 本もと杭人こうひとか、と

3 故山歸無家

故山こざん 帰かえるに家無いえなし

- 4 欲卜西湖鄰
 西湖の隣を卜さんと欲す
 せいこ ととなり ぼく ほつ
- 5 良田不難買
 良田 買い難からず
 りやうでん がた
- 6 静土誰當親
 静土 誰か当に親しむべき
 せいし だれ まさ
- 7 髻張既超然
 髻張は既に超然
 げんちやう すで ちやうぜん
- 8 老潜亦絶倫
 老潜も亦た絶倫
 ろうぜん ま ぜつりん
- 9 李子冰玉姿
 李子は氷玉の姿
 りし ひやうぎよく し
- 10 文行兩清淳
 文行兩つながら清淳たり
 ぶんこうふた せいじゆん
- 11 歸從三人游
 歸つて三人に従つて遊ぶば
 かえ さんにん しなご あそ
- 12 便足了此身
 便ち此の身を了するに足る
 すなわ こ み りやう た
- 13 公隄不改昨
 公隄 昨を改めざれ
 こうてい さく あらた
- 14 姥嶺行開新
 姥嶺 行くゆく新たに開かん
 ぼれい ゆ たら たら ひら
- 15 幽夢隨子去
 幽夢 子に随つて去り
 ゆうむ ししたが さ
- 16 幽花落衣巾
 幽花 衣巾に落つ
 ゆうか いきん お

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。時に都の開封（河南省）に在った。

○襄陽從事李友諒 李友諒は、伝を詳らかにしない。字を、施注は叔益とする。或いは、仲益か。趙令時『侯鯖録』卷三に「襄陽の時、同官の李友諒仲益、張子齊思仲が家の歌人に団茶を贈る」とある。従事は、地方官の職名。刺史の下役人。襄陽は、今の湖北省にあった。本詩題に「婦錢塘」とあり、李友諒は錢塘の人と推定される。

1 〇居杭積五歲 蘇軾は、熙寧四年（一〇七二）六月から七年（一〇七四）の約三年間、通判として、また、元祐四年（一〇八九）三月から六年（一〇九二）二月の約二年間、知事として、都合五年間、杭州に住んだ。そのことを

述べる。2○杭人 杭州の人。蘇軾「表忠觀の錢道士の杭に帰るを送る」詩の引(『合注』卷一九)に「杭人は施を重んじて財を軽んず」とある。3○故山 故郷のこと。○帰無家 帰ろうにも帰るべき家産がないこと。蘇軾「六月二十七日、望湖楼にて酔いて書す 五絶」その五(『蘇東坡詩集』第二册二六九頁)に「我れ本と家無し 更に安くにか往かん、故郷 此の好湖山無し」と歌うように、蘇軾は、その詩の中で、自らの帰るべき生活の場は生地(蜀)ではなく、杭州であると述べる。山本和義『詩人と造物―蘇軾詩論考―』第一部八「望湖楼醉書詩」を参照。4○卜西湖隣 卜隣は、となりに住居を設けること。『春秋左氏伝』昭公三年に「諺に曰く、「宅を是れ卜するに非ず。唯だ隣を是れ卜す」と」とある。蘇軾「邵同年が戯れに買取秀才に贈るに和す 三首」その一(『蘇東坡詩集』第二册四二五頁)の注を参照。5○良田一句 良田は、みのりのゆたかな土地。ひいては隠居に適した土地をいう。蘇軾「木山」詩(『合注』卷三十)に「二頃(の)良田 買い難からず、三年の糧木行(く)くく(糧)く(可)し」とある。6○静士 隠棲して静かに暮らす人。静者。杜甫「張十二山人彪に寄す 三十韻」(『杜詩詳注』卷八)に「静者 心 妙多し、先生 芸 絶倫なり」とある。7○髻張 張弼(字は秉道)のこと。蘇軾は張弼を「髻張」と親しみをこめて呼んだ。蘇軾「葉淳老・侯敦夫・張秉道と(同)に新河を相視す。秉道 詩有り、韻を次ぐ 一首」その二(『蘇軾詩注解』(十)、『作品番号一七五二)に「髻張は乃ち結襪の生、詩酒淋漓として狂怪を出だす」とある。○超然 人よりはるかに抜きんでたさま。俗界を抜け出ていること。蘇軾「張安道が南都の留台に赴くを送る」詩(『蘇東坡詩集』第二册八五頁)の注を参照。8○老潜 僧道潜のこと。潜老師。『蘇軾詩注解』(四)に収める作品番号一六二八の詩題の注を参照。○絶倫 並ぶものが無いこと。『史記』龜策伝に「倫を絶し奇に超えたる者は右と為る」とある。9○李子 李友諒のこと。○氷玉姿 氷玉は、氷と玉。清らかで潔いさま。蘇軾「孔密州が五絶に和す 堂後の白牡丹」(『蘇東坡詩集』第四册二四三頁)の注を参照。10○文行 文章と德行。『論語』述而篇に「子は四つを以て教う、文、行、忠、信」とある。○清淳 高潔で純朴なさま。『後漢書』朱穆伝に「更に海内清淳の士、国体に明達する者を選び、以て其の処に補す」とある。11 12○帰従・便足二句 三人は、張弼、潜老師、李友諒のこと。二句は、これから錢塘に帰る李友諒も合わせて三人が居る錢塘へ、蘇軾も帰って交遊するという願望が実現できたら、一生を満足して終わることが

できると述べる。酒好きで知られた管の畢卓は、「一手に蟹螯を持し、一手に酒杯を持し、酒池の中に拍浮せば、便ち一生を了うるに足る」と言ったという（『世説新語』任誕篇）。13○公隄 隄は、堤。西湖の堤。いわゆる蘇堤のこと。蘇軾が杭州知事在任中に修築した。『蘇軾詩注解（十六）』に収める作品番号一八一七の詩の注を参照。公は、年長者を指す呼称。一句では、蘇軾が自らを指している。○不改昨 旧を改めないこと。昨を作に作るテキストもあるが、14句の「姥嶺新」と対をなすことを踏まえて、昨に従う。14○姥嶺一句 姥嶺は、西湖を取り巻く山嶺の一つ。蘇軾が杭州知事在任中に関わった西湖の治水策（『蘇軾詩注解（十）』に収める作品番号一七五一の詩の注、また、7句の注に引く作品番号一七五二の詩の注を参照）にまつわる王遠『春渚紀聞』巻六「回江の利」の記事に「今、龍山姥嶺を鑿く」と、姥嶺の名が見える。この記事によれば、翰林字士承旨を拝した蘇軾に代わって杭州知事に着いた林奇に、姥嶺開鑿は太守（林奇）の身を危うくするものだと諷する者があり、開鑿の話は止んだという。15○幽夢 おぼろげな夢。蘇軾「喬太博が左臈に換えられて欽州に知たりと聞き、詩を以て招飲す」詩（『蘇東坡詩集』第四冊八〇頁）の注を参照。16○幽花 もの静かに咲く花。蘇軾「新城の陳氏の園。晁補之の韻に次ぐ」詩（『蘇東坡詩集』第三冊三六二頁）の注を参照。幽花を松花に作るテキストもある。李白「殷明佐が五雲裘を贈らるるに酬ゆる歌」（『李太白全集』巻八）に「軽きこと松花の金粉を落とすが如く、濃きこと錦苔の碧滋を含むが似し」とある。幽花を、15句の「幽夢」にひかれての誤りとする見方もある（『校注』巻三六）が、決め手を欠く。ここでは『合注』に幽花とするのに従う。○衣巾 衣と頭巾。魏の繁欽「情を定む」詩（『玉台新詠』巻一）に「思う 君が幽房に即き、寝に侍して衣巾を執らんことを」とある。

杭州住まいは都合五年を重ね、自分はもう杭州人だと思っています。郷里には、帰ろうにも帰りたいと思うような家産もないこととて、西湖の畔に住みたいものです。よい田地を買い求めるのは難しくありませんし、つつましく暮らす人としていきたいどなたと親しくしましょうか。ひげの張さんは悠揚せまらず、潜老師もまた凡俗を超えたお方。

李先生は清らかで潔い持ちまえ、詩文も行ないもともに高潔純朴です。錢塘に帰ってお三方と交遊することができれば、それで一生を満足して終えられます。この公が築いた西湖の堤は昔のままに、あの姥嶺は新たに拓かれることになるでしょう。おぼろげな夢の中、あなたに附いて行ったら、ゆかしく咲いた花がはらはらと私の着物や被り物に降りかかってきました。

（担当 原田直枝）

一九五一（施三三—三三五）

次韻吳傳正枯木歌

吳伝正が「枯木の歌」に次韻す

- | | | |
|---|---------|------------------|
| 1 | 天公水墨自奇絶 | 天公の水墨 自ら奇絶 |
| 2 | 瘦竹枯松寫殘月 | 瘦竹 枯松 残月を写す |
| 3 | 夢回疎影在東窗 | 夢回って 疎影 東窓に在り |
| 4 | 驚怪霜枝連夜發 | 驚き怪しむ 霜枝 連夜発くか、と |
| 5 | 生成變壞一彈指 | 生成 變壞 一彈指 |
| 6 | 乃知造物初無物 | 乃ち知る 造物の初めより物無きを |
| 7 | 古來畫師非俗士 | 古來 画師は俗士に非ず |
| 8 | 妙想實與詩同出 | 妙想 實に詩と同じく出づ |
| 9 | 龍眠居士本詩人 | 龍眠居士は本と詩人 |

- 10 能使龍池飛霹靂
 君雖不作丹青手
 詩眼亦自工識拔
 龍眠胸中有千駟
 不獨畫肉兼畫骨
 但當與作少陵詩
 或自與君拈秃筆
 東南山水相招呼
 萬象入我摩尼珠
 盡將書畫散朋友
 獨與長鋏歸來乎

- 能く龍池をして霹靂を飛ばさしむ
 君は丹青手と作らずと雖も
 詩眼 亦た自ら工に識拔す
 龍眠が胸中 千駟有り
 独り肉を画くのみならず 兼ねて骨を画く
 但だ当に与に少陵の詩を作るべし
 或いは自ら君が与に秃筆を拈らん
 東南の山水を相招呼し
 万象 我が摩尼珠に入る
 尽く書画を將て朋友に散じ
 独り長鋏と帰りなんか

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○呉伝正 名は安詩。伝正はその字。浦城（福建省）の人。神宗期の宰相・呉充の長子。礼部員外郎、右司諫、中書舍人などを歴任した。元祐党人（蘇軾の仲間たち）のひとり。『宋史』巻三二二に伝がある。呉安詩の元の詩は伝わらない。

1 ○天公水墨 歐陽炯「貫休が夢に応う羅漢画の歌」（『全唐詩』巻七六一）に、「天 水墨をして羅漢を画かしむ、魁岸なる古容 筆頭に生ず」（魁岸は、すぐれたさま）とある。2 ○瘦竹枯松 白居易「大林寺に遊ぶの序」（『白居易集箋校』巻四三）に、「寺を環りて清流・蒼石・短松・瘦竹多し」とある。3 ○疎影 まばらな影。杜甫「西枝村に草堂を置く地を尋ね、夜賛公が土室に宿す 二首」その二「天寒くして鳥已に帰る」で始まる詩（『杜詩詳注』巻七）

に、「士室 白光を延ぎ、松門 疏影歌たり」(歌は、さしくる月の光のかがやくさま)とある。4○連夜発 則天武后「臘日、詔を宣のたまいて上苑に幸す」詩(『全唐詩』巻五。この詩にまつわる故事は『唐詩紀事』巻三に収める)に、「明朝 上苑に遊ぶ、火急 春を報じて知る、花は須らく夜を連ねて発くべし、曉風の吹くを待つ莫かれ」とある。5○生成 生まれ育つ。杜甫「屏跡 三首」その二(『杜詩詳注』巻一〇)に、「桑麻 雨露深く、燕雀 半なば生成す」とある。○変壞 変化し滅びる。○彈指 指をはじくほど短い時間。「永業に過れば、文長老 已に卒せり」詩の注(『蘇東坡詩集』第三冊三三二頁)を参照。6○乃知一句 郭象「莊子序」に、「上に造物の物無きを知り、下に有物の自ら造るを知る」とある。7○古来一句 蘇軾「歐陽少師 蓄うる所の石屏を賦せしむ」詩(『蘇東坡詩集』第二冊一一〇頁)に同じ句がある。その注を参照。9○龍眠 李公麟(一〇四九—一一〇六)のこと。字は伯時。舒州(安徽省)の人。官は朝奉郎に至り、晩年は龍眠山に隱居して龍眠と号した。画家として知られ、特に馬を描くのに長ずる。蘇軾と親交があった。10○龍池 唐代の長安の南、南薰殿の北にあった池。杜甫「韋諷録事が宅にて曹將軍が画ける馬の図を觀る歌」(『杜詩詳注』巻一三)に、「曾て貌ばす 先帝の照夜白、龍池 十日 霹靂かみなり飛ぶ」(照夜白は、玄宗の愛馬の名。霹靂は、いなびかり)とある。11○丹青手 画家をいう。唐・高蟾「金陵晚望」詩(『全唐詩』巻六六八)に、「世間 無限の丹青の手、一片の傷心 画 成らず」とある。12○詩眼 詩人のすぐれた眼力。○識拔 人物をよく知って抜擢すること。『三国志』魏書・崔林伝の注に引く「晉諸公の贊」に、「崔 林 同郡の王綰を民戸の中より識拔し、卒に名士と為る」とある。13○龍眠一句 羅大經『鶴林玉露』巻六に、李公麟を評して、唐代の馬をえがく名手韓幹と同じく、馬をよく觀察してその姿を腦裏に留めおくこと、「久久なれば則ち胸中に全馬有るなり」という。駟は、馬を数える単位で、千駟は、馬四千頭をいう。『論語』季氏篇に、「齊の景公 馬千駟有り」とある。14○不独一句 画家が馬をえがくに際して、肉と骨の両方を十分に表現すべきと蘇軾が述べた例としては、「韓幹が牧馬の図に書す」詩(『蘇東坡詩集』第四冊二〇九頁)に、「既馬 肉多くして尻こ円なり、肉中に骨を画きて尤も難きを誇る」、また「子由が李伯時の藏する所の韓幹が馬に書するに次韻す」(『合注』巻二八)詩に、「幹は惟だ肉を画きて骨を画かず、而るを況んや実を失して空しく皮を留とむるをや」などがある。15・16○但當・或自二句 杜甫「壁

上の韋偃が画馬に題する歌」詩（『杜詩詳注』巻九。韋偃は、杜甫と同時代の画家）に、「戯れに秃筆を拈りて驂駒を掃う、欬ち見る 麒麟の東壁に出づるを」とある。ここでは呉安詩を杜甫、李公麟を韋偃になぞらえ、詩人が詩を作れば、画家が筆を執って絵を描いてくれようと述べる。18〇万象 あらゆる形象。「僧清順 新たに垂雲亭を作る」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊五三頁）を参照。〇摩尼 仏教で、龍王の脳中にある玉。ここでは、「天公の水墨」が、わが脳中に再現されることの喩え。「僧潜が贈らるるに次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊五七四頁）を参照。20〇長鉄婦来 戦国時代、斉の孟嘗君伝の食客馮驩が不遇を嘆いて、「長鉄よ 婦りなんか……」と歌った故事をふまえる。「竹枝の歌」の注（『蘇東坡詩集』第一冊八五頁）を参照。

天の描いた（自然になる）水墨画はもとよりすばらしいもので、細い竹や枯れた松が残りの月に照らされているさまがそっくりに写されている。夢から覚めるとまばらな影が東の窓にのぞいていて、霜のおりた（ような梅の）枝が夜のうちに花を咲かせていることに驚いた。ものが現れ消えるのはあつという間のこと、造物のわざとはそもそも（物質的には）何も存在しないことなのだ、これで分った。

昔から画家は凡俗の人とは違い、その並外れた発想はまことに作詩と出処が同じものだ。龍眠居士こと李伯時も本来は（ものごとの神髄をつかみうる）詩人であり、えがかれた画に感動した龍が、龍池より霹靂を飛ばして天に昇るほどだ。あなた（呉伝正）は画家でないけれども、詩人としての優れた能力で絵の価値を同様に見抜くことができる。伯時は胸の中で四千頭もの馬を飼っているから、表面的な馬の肉付きのみならず内在する骨格までも描くことができる。あなたが杜甫のような傑作を作ってあげるならば、（李伯時も）あなたのために使い古したその筆をまた執ることになるかもしれないのだ。

呉越の水墨の如き山水がおのずと私の透明な心に入ってくる。（物としての）書画はことごとく友人たちに分け与えてしまってもよいのだ。（馮驩ではないが）長い剣だけを持って故郷に帰ればよい。

